

70年たっても忘れられない空襲

昭和20年6月26日、空襲警報が鳴ったとき、父は9才の私に「家の防空壕ではなく、警防団の壕へ入っておけ」と言いました。警防団の壕は西方寺（真砂一丁目）の南側の竹やぶに掘ってあって、個人宅の壕より大きくて頑丈でした。私はそこに姉2人と入ったのですが、父は外の様子を見るために壕には入りませんでした。

10時ごろ 吹田方面からB29が飛来し、西方寺周辺に1トン爆弾3発と500キロ爆弾2発、および小爆弾2発を落としたのです。壕全体が、地震が起こったかのように大きくゴオッと揺れて、土煙で辺りが一瞬薄暗くなりました。揺れが収まって息をすると口に入ってくる空気が油臭いんです。姉が持ってきてくれた水を飲むまで、本当に油を飲み込んだように口の中がねばついていました。

外に出ると、さっきまで目の前にあった西方寺がペッシャンコになっているのです。父の姿は見当たらず、近所の人に聞くと「爆弾が落ちる前までいっしょにいたが、違う方向に行った」という答えでした。後で知ったのですが、父は爆弾の破片で足の大腿部を大きくえぐられ骨折して、西田さんの家に担ぎ込まれていたそうです。出血がひどく、畳が父の血で染まったと聞きました。

語り部：大槻種男氏 茨木市真砂在住

病院には空きがなくて、父は養精国民学校（現養精中学校）に運ばれ治療を受けました。でも、なにぶん戦争中で薬が足りない。母と姉が看病しましたが、結局父は7月9日に亡くなりました。今であれば助かっていたでしょうが、当時の状況では、仕方のないことだったと思います。

父が亡くなった9日に、父の遺体を引き取りに養精国民学校まで行ったところで、空襲警報が鳴りました。防空壕のない場所だったので、急いで教室に入り、頭を抱えて伏せました。すると、戦闘機が飛んでくる音、そして、機銃を撃つ音が聞こえたのです。バラバラッと、まるで雨が打ちつけるような音でした。

その戦闘機が、玉島国民学校（現玉島小学校）でも機銃掃射を行い、校舎内で、児童2人が犠牲になり、5人が重軽傷を負っていたのです。

26日の真砂の空襲では、30軒余りの集落と田園が広がる地域で、前日から始まった田植がとても忙しい最中に、真砂住民19人と疎開の人と田植の手伝いの方13人の死者32人、重軽傷者10人、牛2頭が犠牲になり、全半壊8軒の被害を受けました。

遺体を並べていた光景が目には焼きついて、戦争が終わってもその場所の前を通るのが恐ろしかった。70年たっても、忘れることができません



付記

- ① 大槻種男氏の話から筆耕し、下記の2資料から引用・編集して、大槻氏の校閲済
- ② 広報「いばらき」2015年7月号 特集「そして夏がくる 戦後70年」から引用
- ③ ブログ：「真砂で32名犠牲に」から引用

<http://blog.livedoor.jp/shihobe505/archives/28901161.html>